考古学からみた霊魂の祭祀
―漢魏晋の墓と宗廟を中心に―

向井 佑介
（京都大学 人文科学研究所）

中国の伝統的な思想では、人間の「たましい」は「魂（精神 spirit)」と「魄（肉体 body)」という二つの要素からなり、人間の死は「魂」の離脱によって引き起こされると信じられた。死者の肉体は墓に埋葬し、霊魂は廟において祭祀するのが、古代（とりわけ周代）以来の礼法にかなった正しい慣習とされた。儒教の考え方にもとづけば、この「葬」と「祭」はいずれも亡き親への「孝」を体現する儀礼でありながら、肉体を埋葬する「葬」が凶礼であるのに対し、霊魂を祀る「祭」は吉礼であり、両者は明確に区別すべきものであった。それでは、死者を弔う一連の儀礼のプロセスにおいて、「葬」と「祭」の区別はどこにあるのか。古代の喪葬儀礼について述べた諸文献によれば、死者の柩を墓に埋葬し、墓から魂を迎えて「虞」の儀礼を終えるまでは凶礼に属し、そのあと魂は廟に遷されて吉礼によって祀られる。こうした建前にもとづけば、墓のなかに霊魂は存在しないはずである。

ところが、現在までに中国各地で発掘された墓のなかには、遺体をおさめた柩とは別に、霊魂の祭祀をおこなったと推定される場所が発見されることが少なくない。報告者はかねてより墓中のそれを「神坐（神座、霊魂の居処)」と解釈してきた。本来の神坐は、廟などに設置した「主」を霊魂の依代としたものであるのに対し、前漢末以降の墓では、しばしば墓室内にも神坐が設置された。本報告でとりあげる漢魏晋墓の神坐は、柩前方の空間に設置されるほか、墓の西南部分に設置されることが多い。さらに、後漢後期以降はその場所にしばしば墓主の図像が描かれた。こうした現象と、文献史料に記載された廟における霊魂の祭祀とを照合すると、墓における神坐の位置が廟における神坐の位置と関係することがわかる。墓中の神坐を前にしてどのような儀礼行為がおこなわれたかは、廟における霊魂の祭祀と対比することによって、より明確に理解できるはずである。本報告では、以上のような問題意識にたって、中国の漢代から晋代を中心とした時代に、霊魂のまつりがどのようにおこなわれていたのかを、考古資料と文献史料の照合をもとに考察することとしたい。

死者をまつる
―南アジア聖者廟の祭祀―

二宮 文子
（青山学院大学 文学部）

本発表では、南アジアの聖者廟で実践されている祭り、特にウルス（聖者祭、命日祭）を取り上げ、南アジアのイスラーム信仰におけるその位置付けについて論じる。死んだ聖者の墓を核とする聖者廟（ダルガー、マザール）は、南アジアのイスラーム信仰を支える施設の一つである。参詣対象としての聖者は、一般に宗教指導者、長老を意味するピールと呼ばれることが多い。聖者廟に祀られている聖者、ピールの属性は様々である。南アジアで最もよく見られるのはスーフィー聖者であるが、その他にもウラマーや殉教者の聖者廟も数多く見られ、それらの中には歴史性の希薄な聖者も存在する。このような聖者廟での宗教実践の中でも、「祭り」と呼ぶにふさわしいものに、聖者の命日に行われるウルスがある。聖者の死を、アッラーとの真の神秘的合一が達成された瞬間とみなし、それを婚礼になぞらえて聖者の命日を祝う祭祀である。近著の中でウルスの理論的背景や歴史を整理したグリーンは、ウルスを、イランや中央アジアで発達した理論や伝統に基づき、南アジアに「移住」してきたイスラーム信仰儀礼の一つと位置付け、廟の周辺にイスラーム的空間を創出するものと論じている。この議論は、従来、地域独自の信仰実践、土着的イスラームと結びつけられてきたウルスについて、地域を超えたイスラームの伝統や教条との繋がりを強調している点に特徴がある。本発表では、ウルスについて触れた前近代のペルシア語、ウルドゥー語の文献や、南アジアの聖者廟における実際の祭祀の事例を取り上げ、グリーンが十分に議論していない、南アジアの信仰実践の中におけるウルスの特徴を論じる。祭祀の実例としては、アジメールのムイーヌッディーンなどのよく知られた聖者のウルスに加え、スーフィー聖者廟で行われる預言者生誕祭、歴史上の実在性が曖昧な殉教者であるバフライチのサーラール・マスウードのウルスなどの多様な例を示し、イスラーム以外の宗教の信仰実践との共通性や差別化という観点も交えて、ウルスが特に南アジアにおいて広く見られる祭祀として発展した背景について考察したい。

豊国大明神の近世～近代

久世 奈欧
（京都光華女子大学 短期大学部）

日本において歴史上の人物を神として祀る例は少なくない。それらには、その霊を慰めるためのものや、生前の業績を称える目的で祀られたものなどがある。特に後者のような神格の場合には宗教感のみならず、当該人物をどのように評価するのか、といった歴史観が如実に表れる。その代表的な例が、豊国大明神である。

豊国大明神とは、死後、豊臣秀吉に与えられた神号である。本報告では、豊国大明神をめぐる近世～近代における状況の変化をたどるとともに、そこから見える社会の宗教感・歴史観の変容の一端を明らかにしたいと考える。

豊国大明神を祀る豊国社は、慶長 4 年（1599）京都・阿弥陀ヶ峰の麓に壮麗な社殿を構えた。しかし豊臣家の滅亡とともに、豊国社破却の沙汰が下され、その祭祀は廃絶した。その後近世を通じて、豊国社の跡地は、同社に近接した廟所・方広寺とともに、妙法院の管理下に置かれた。一方、幕藩体制下で公に豊国大明神を祀ることは忌避されたと考えられており、一部の大名家などで密かにその信仰を伝えてきた例が報告されている。

しかし報告者は以前、寛文年間（1661～1673）の豊国社再興計画と、その後に妙法院鎮守・新日吉社内で豊国大明神を祀る摂社・樹下社が創建されたことについて論じ、必ずしも忌避されてきたわけではなかった状況を紹介した（拙稿「近世期京都における豊国大明神の展開」（『比較都市史研究』34-2、2015 年））。

今回の報告では、妙法院や新日吉社を例にとりながら、近世～近代において豊国大明神が、神社の内外でどのような存在となっていたのかを、当時の思想家の著作なども参照しながら検討したい。

また近代においては、豊臣秀吉は勤皇家であり海外進出を果たした人物として民衆教化のために使われていくことが知られており、明治 13 年（1880）には別格官幣社・豊国神社が方広寺跡に再興される。今回は特に近世後期における豊臣秀吉および豊国大明神をとりまく様相を踏まえた上で、近代においての豊臣秀吉・豊国大明神に対する再評価についても、考えを巡らせたい。

北京の民衆と春のまつり

石野 一晴
（清泉女子大学 文学部）

本報告で扱うのは、明清時代から中華民国時代にかけて北京（北平）で行われた神々を巡る祭礼である。この地には明末の皇后・皇太后や宦官をはじめとする多数のパトロンによって城内外に多数の寺廟が建設され、各寺廟の祭礼には大勢の民衆が参詣に集った。中でも有名なものは、顧頡剛らが現地調査を行ったことでも知られる妙峰山であろう。この山は碧霞元君という中国北部で最も信仰された女性神を祀る著名な聖地であった。民衆たちは北京とその近郊からこの山へと続々と押し寄せ、喇叭や銅鑼などの音色が城内外を満たした。その数、数十万とも言われる。北京の人々は「香会」と呼ばれる講中のごとき集団を組織し、この祭礼のために道路や橋梁の整備を行い、訪れる人々には茶や粥、塩や薬などを振る舞った。沿道で獅子舞などの娯楽を提供するのも彼らであった。参詣を終えた人々は花簪を髪に挿し自宅へ幸福を持ち帰ったという。旧暦四月初頭から十五日にかけて繰り広げられた斯様な賑わしき光景は、既往の研究では、いかに碧霞元君信仰が盛んであったのかの証左として語られてきた。

では、このような祭礼はいかなる時代背景のもと行われたのであろうか。管見の限り、明代と清代、そして顧頡剛たちの見た光景のあいだには質的な差異が存在しているように思える。そして、一部の論者が顧頡剛たちの現地調査の記述をもとに語るような日常と非日常のあいだの境界的な状態は本当に存在したのか。仮に存在したとすれば、それは明末から民国期に至るまで一貫して存在し続けたのか。本報告では上記のような問題意識をもとに、北京に関わる諸種の地方志などを改めて検討しなおし、「皇帝のお膝元」で行われた民衆のまつりが、どのような性格を有していたのか、可能な限り歴史的文脈に沿った説明を試みる。

音楽フェスティバルと地域社会

永井 純一
（関西国際大学 社会学部）

今日では音楽フェスティバルと称されるイベントが数多く開催されている。このこと自体は「文化の祝祭化」に関係する世界的な流れでもあるのだが、日本に限っていえば、2000 年以降に「フェス」と呼ばれる催しが増加し、コロナ禍以前には 1 年間に 3〜400 件が開催されていたと推測される。都市部だけでなく地方での開催も多く、しばしば観光や地域振興、まちづくりの文脈で注目される。その多くが継続的な開催を目指し、実際に 1 年に 1 回ペースで開催されていること、英米に比べると市場の寡占が進んでおらず、アマチュアを含むさまざまな主催者によって規模や趣旨が多様であることは、今日のフェスの大きな特徴のひとつである。

ただし、英米に比べると、本格的な調査や学術的研究はすすんでおらず、その有効性や政策としての可能性についての議論は乏しい。そもそも、「地元を盛り上げる」「活性化のため」といった言葉が漠然と並べられているが、具体的にフェスが地域社会にとってどんな意味で役に立つのか、といった具体的な成果や客観的な評価は定まっていない。それゆえに、行政による積極的な支援は乏しく、コロナ禍においては厳しい目に晒されることにもなった。

以上のことから、フェスによって地域社会が発展することが期待されつつも、フェスと地域社会は「うまい付き合い方」を見出せずにいるのではないか、と考えられる。本報告ではこうした関心のもと、フェスをめぐる国内の状況を把握した上で、事例を通じてフェスが地域社会にもたらす影響とその可能性について述べたい。

現状把握には、報告者が行なった主催者を対象とした量的調査によって得たデータを用いる。この調査はフェスと行政や市民団体などとの関わりの内容や程度、地域貢献について定量的に把握することを目的に行なった。事例としては伊丹市で開催されているグリーンジャムを取り上げる。グリーンジャムは 2014 年から開催されている無料フェスであり、協賛などによって制作費を賄い、市民ボランティアの参加によって成り立っている。これらのミクロとマクロの視点を行き来しつつ、フェスを地域社会において、どのように位置づけられるのかについて考えたい。